東邦学誌第41巻第3号抜刷
２０１２年１２月１０日発刊

子育てにおける環境と保護者の意識について

鹿　渡　よしみ
後　藤　永　子
森　　美利花

愛知東邦大学

東邦学誌
第41巻第３号
2012年12月
論　文

子育てにおける環境と保護者の意識について

鹿　渡　よしみ
後　藤　永　子
森　　美利花

目　　次

１．はじめに
２．研究目的
３．研究方法と調査内容
４．結果
５．考察
(1)　アンケートの結果から（現在の子育て意識と環境）
(2)　「子育て支援」の必要性（現代社会のひずみ）
(3)　保護者と大学生のアンケート結果から（意識の比較）
(4)　自然環境と“ヒト”との関わり
(5)　保護者の意識啓発
(6)　人的環境・保護者の意識に期待
６．おわりに

１．はじめに

いつの間にか市民権を得た単語に「環境問題」がある。地球温暖化、異常気象、放射能汚染、などの単語も、ありふれた日常語である。また、安全神話、風評被害、基準値以下、などと次々と訳のわからない単語も世の中を闊歩している。

レイチェル・カーソンは『センス・オブ・ワンダー』で次の世代へのメッセージとして彼女の到達した境地を述べている。それは彼女の尊敬するシュバイツアーの言葉で「自然の中にある（生命への畏敬）」と言うべきものである。

この次世代へのメッセージには、多くの支持者がある。しかしながら、彼女の問題提起から半世紀近くも経つというのに、地球の症状は確実に悪化の一途をたどっている。この現実には、人類史上かつて無いスピードで科学や資本主義的思想が広がり、人間の生活パターンがこれらの問題に追い付かなかったことも一因であると考えられる。

生活は便利にはなったが、“人”が幸福になった訳では無い。新聞紙面は、日々さまざまな人間模様の織り成す自己中心的で凶悪な犯罪で溢れている。TVでは、資源を独り占めしようとする国同士の緊張感溢れる映像が繰り返し映し出される。国際結婚をした両親が、小さな子どもの

前でそれぞれの母国の利益を主張し合う姿があった。暫くして「･･･あんな島なんか消えてしまえば良い」と、つぶやくあどけない声が漏れてきた。

人々は目前の損得勘定に振り回され、現実に向き合うことすら忘れている。地球の未来についての緊張感などは、まるで無いがごときである。“ヒト”という生物は、この地球を、どうにかしてしまう存在のようである。

もっともっと大切なことに、気づかねばならない時期の筈である。今こそ、この地球の生きとし生けるものが共に助け合って、命を受けたことを謳歌できるような、持続可能な世界を目指す最後のチャンスではないだろうか。

※“ヒト”とカタカナで書く場合は、“サル”・“イヌ”と同様で、動物の仲間としての“ヒト”である。

“人”の場合は、単なる動物ではなく、“人間”のことである。理性と豊かな心情を併せ持つ、進化した動物の“人間”のことである。

２．研究目的

ますます深刻な状態になっていく地球環境と人間性の荒み加減にブレーキをかけ、方向転換を図る手立てを模索することを課題として、考察を試みる。原点は「“ヒト”から人間への子育て」である。教育における環境要素としては大きく人的環境（家庭や地域の人々とのふれあい）と、物的環境（生活範囲の規模や自然環境）があげられる。今回は、特に人的環境・保護者の意識の在り方を研究のテーマとした。

３．研究方法と調査内容

Ｎ市M区において主任児童委員が主催する子育て支援サークル「Ｈコミュニティーセンター・Ｔクラブ」に研究の主旨をお話して同意を頂き、無記名による質問紙を用意実施した。乳幼児を連れてのアンケート記入であるため、ゆとりのない場合は自宅に持ち帰り次回の回収となった。途中に夏休みが入るなどで、回収は2012年７月から９月にかけてとなった。

質問紙の内要は、以下である。

問１．回答者は誰であるか

問２．回答者の年齢

問３．参加の子どもの性別、年齢、兄弟数

問４．子育てにおいて、普段の過ごしかた

問５．理想の遊び環境とはどのような場所か

問６．習い事について、すでにさせていること、あるいは予定があること

問７．「子育て支援サークル」に参加した動機

問８．「交流」に期待する事

問９.「情報」に期待する事

問10.「育児相談」に期待する事

問11.「講習」に期待する事

問12.「子育て支援サークル」に参加して、子どもや保護者に変化があったこと

問13. 保護者が子どもの頃に夢中になって取り組んだ事

問14. 保護者が子どもの頃に得意または好きだったことは親の影響があるか否か

問15. 保護者の興味・関心事・趣味などを子どもにさせたいか

問16. 自然体験や本物に触れる経験をどのように考えているか

問17. 子どもの将来を考えて特定（体育系、芸術系など）の方向に進むべく配慮をしているか

４．結果

回答者は35人であった。乳幼児を連れてのアンケート記入という状況下、部分的な記入漏れが多くみられた。

問１．回答者については100％が母親である。

問２．回答者の年齢については80％が31歳～40歳である。40歳以上が１名、それ以外は20代である。

問３．参加の子どもの性別については男児20人、女児17人である。年齢的には０歳～３歳までである。男児の50％がひとりっ子であり、女児は30％がひとりっ子である。兄弟姉妹での参加も数組あった。

問４．子育てにおいて、普段の過ごしかたとしては、74％が家族で室内遊びである。

問５．理想の遊び環境については86％が自然豊かな戸外との回答である。

問６．習い事については37％が楽器やリトミックをさせている、あるいは予定である。

問７.「子育て支援サークル」に参加した動機としては86％が「交流」を１番に挙げている。

問８.「交流」に期待することについては、94％が保護者と子ども双方の交流である。

問９.「情報」に期待する事については、54％が発育に関することである。

問10.「育児相談」に期待する事については、43％が先輩保護者のアドバイスである。

問11.「講習」に期待する事については、37％が子育てのヒントである。

問12.「子育て支援サークル」に参加して、子どもや保護者に変化があったこととしては、

・色々な方と話をすると迷いがなくなる時もあり、安心感が生まれる。

・同世代の子ども同士がふれ合えることで、子どもの世界観が広がった。

・親子共に行動範囲が広がり、友だちができた。引っ越してきたばかりで有り難い。

・ストレス発散ができた。

・同年齢と交流することで表現や感情の伝え方に変化が現れた。

・子どもは十人十色だということが分かり、子どもに対して優しくなれた。

などである。

問13. 保護者が子どもの頃に夢中になって取り組んだ事については、49%が野外活動である。

問14. 保護者が子どもの頃に得意または好きだったことは、66%の家族が行動を共にして応援をしてくれており、親の影響がある。

問15. 保護者の興味・関心事・趣味などを子どもにさせたいかについては、46%ができればさせたいが１位である。

問16. 自然体験や本物に触れる経験をどのように考えているかについては、69%が少しでも多く子どもに経験をさせたいが１位である。

問17. 子どもの将来を考えて特定（体育系、芸術系など）の方向に進むべく配慮をしているかについては、60%がいろいろな可能性を試させたいとし、40%が暫く様子を見て期待する能力があれば応援したいである。

５．考察

(1)　アンケートの結果から（現在の子育て意識と環境）

回答者35人は80%が31歳～40歳で年齢的には少し落ち着きのあるメンバーであった。子育てについて、理想の遊び環境は86%が自然豊かな戸外としたが、実態は74%が家族で室内遊びをして日常を過ごしており、習い事についても37%が楽器やリトミックといった室内の活動が１番であった。理想と現実には差が出ていた。

「子育て支援サークル」に参加した動機としては86%が「交流」を１番としており、さらに94%が保護者と子ども双方の交流を期待している。「情報」としては約半数の54%が発育に関すること、「育児相談」では、43%が先輩保護者のアドバイスを期待した。また、「講習」では、37%が子育てのヒントを期待した。これらのことから、現代の子育てでは親子共に交流が不足しており、我が子の発育具合が不安で、育児のアドバイスや子育てのヒントが欲しいということが読み取れる。

「子育て支援サークル」に参加して、変化があったこととしては、同年齢と交流することで表現や感情の伝え方に変化が現れ、子どもの世界観が広がったこと。色々な方と話をすると、子どもは十人十色だということが分かり安心感が生まれたこと。親子共に行動範囲・交友関係が広がりストレスも発散できて、子どもに優しくなれたことなどが具体的に記されており、地域のコミュニティーセンターとしての機能が上手く働いているようにみえた。しかし、「子育て支援サークル」のお手伝いをしている保健師や民生委員によれば、「心配な人ほど来てくれない」と述べていた。自分から交流を求めて参加できる人は、精神的・時間的にゆとりのある恵まれた環境の親子と言えるのであろうか。

(2)　「子育て支援」の必要性（現代社会のひずみ）

少し前に「公園デビュー」という言葉が流行ったが、今は「コミセンデビュー」のようである。公園は若い親子にとっては、怖い人のいる危険な場所となってしまったのかもしれない。身勝手

な理由で弱者や通りすがりの人に刃を振りかざす事件が後をたたないのも事実である。また、密室の子育てで母親による育児放棄などの虐待事件も発生している。核家族、一人親家庭、転勤族などがあたりまえで、ひと昔ふた昔前では考えられないような、孤独で不安な子育て環境なのである。

保健師が産後訪問の時に「子育て支援センター」の案内をしているとのことである。この子育て支援センターとは、地域全体で子育てをする基盤形成を図るために、子育て家庭の支援活動を行い、交流・情報・育児相談・講習の４つの柱から成り立つものである。

「子育て支援」とは次代の社会を担う子ども一人ひとりの育ちを社会全体で応援するシステムのことである。子育てにかかる経済的負担の軽減や、安心して子育てができる環境整備のための施策など、総合的な支援のことである。事業施策としては、育児不安についての相談指導や、子育てサークル等の育成・支援などがある。保育所においては地域の保育需要に弾力的に対応をしている。また、ベビーシッターなどの情報提供や家庭的保育を行うものへの支援としては、電話・訪問・相談指導・情報提供などがある。

「人間は『生理的早産』の状態で生まれてくる」（Portmann. 1951）誕生後１年間に生じる発達の特徴を『直立姿勢』『言語』『洞察力ある行為』とまとめている。この人間的な特徴そのものが、生後獲得されるところに人間の本質がある。人間の発達にとって、母親の胎外、つまり社会というものが欠かすことができない。人間は生まれながらに社会的動物であり、社会的な関係なしに人間的な特質を獲得する事は不可能である。

現代社会では、“ヒト”から人間になるうえで重要な、いわゆる社会的環境が貧相になっている。社会的には未熟児状態で生まれてきた子どもを持つ母親は、本能的に今の子育て環境にストレスを抱えているのである。本来は社会的動物である人間が、家族構成や住環境の変化で孤立状態となっており、人間としての健全な育ちが望めないのである。そこを紡いでくれるのが「子育て支援」などのシステムである。

子育てサークルでのアンケートでは保護者は「交流」を１番の目的としており、子育てのヒントや先輩保護者のアドバイスを求めていた。時代のニーズである。

人間を育てるうえで重要なのが、保護者の子育て意識である。どのような人間に育ってほしいか、その目指すところの意識の内容が最重要課題である。それには“ヒト”の特性をしっかりと認識したうえで育てる事である。社会的動物である人間は孤独が苦手であり、自己の存在を認められると気分が晴れるようだ。“ヒト”は楽しい体験をするとその事が好きになり意欲が育つものである。さらに具体的な憧れの対象ができると、それを目標として自ら努力をするようにもなるのである。これは伝統芸能や、スポーツ少年団や体育教室などに所属している親子の姿に通ずるものがある。

(3)　保護者と大学生のアンケート結果から（意識の比較）

ここで、今回のアンケートでの保護者の回答と、大人の仲間入りをしたばかりの20歳の大学３

回生にとったアンケートとの比較を試みた。（体育系方面が得意な学生32人に対して行った）

「Hコミュニティーセンター・Tクラブ」のアンケートでは、保護者自身が子どもの頃に夢中になって取り組んだ事は約半数の49％が野外活動であった。また、子どもの頃に得意または好きだったことは親の影響か否かの設問では66％の保護者が親の影響と答えている。家族が行動を共にして自分を応援してくれたと記入している。

大学生のアンケートでは、子どもの頃に夢中になって取り組んだ事は、88％が野外活動であった。また、自分はこのようになりたいと興味・関心を持ったきっかけは34％がＴＶの影響と答えたが、それは幼い頃の家族の関心事との関係があるかを尋ねると、50％があると答え、親の影響は否めない。体育系方面が得意な学生たちは、大半が子どもの頃から何らかのスポーツ教室に所属して育てられており、家族が行動を共にして応援をしてくれていた事がうかがえるのである。

「Hコミュニティーセンター・Tクラブ」の母親たちのアンケート結果と大学生のアンケート結果はよく似た回答となった。“ヒト”という生物は野外活動が好きで、育ちのうえで興味・関心・好きだったことなどは親の影響が大きいことがわかった。

さらに、「Hコミュニティーセンター・Tクラブ」でのアンケートで保護者自身の興味・関心事・趣味などを自分の子どもにさせたいかの設問では46％ができればさせたいであった。自然体験や本物に触れる経験に対する設問では69％が少しでも多く子どもに経験をさせたいであった。また、すでに子どもの将来を考え特定（体育系、芸術系など）の方向に進むべく配慮に関しては60％がいろいろな可能性を試させたいとし、40％が暫く様子を見て期待する能力があれば応援したいであった。

同じ質問を、さきの大学生26人に、将来、自分が親になった場合を想定してアンケートをとったところ、親の興味・関心事・趣味などを子どもにさせたいかの設問では46％ができればさせたいであった。自然体験や本物に触れる経験に関する設問では62％が少しでも多く子どもに経験をさせたいであった。また、１～２歳児から子どもの将来を考えて特定（体育系、芸術系など）の方向に進むべく配慮をするか否かの設問では62％がいろいろな可能性を試させたいとし、19％が暫く様子を見て期待する能力があれば応援したいであった。

先のアンケートと同様に、まだ親になったことが無い学生であっても、「Hコミュニティーセンター・Tクラブ」での母親たちのアンケート結果と良く似た回答であった。

これらの考え方や感情は、自分が親から慈しみ育てられた記憶であり、“ヒト”としての本能・特性のようである。子どもは愛情深く育てられると、健やかに能力を発揮することができ、心豊かに生きることができる人間になれるのである。保護者の子育て意識（人的・社会的環境）の質を高めるところに、本来の人間の可能性を期待したい。

(4)　自然環境と“ヒト”との関わり

「Hコミュニティーセンター・Tクラブ」のアンケート結果では86％が自然豊かな戸外を理想の遊び環境としており、72％が子どもに自然体験や本物に触れる経験を少しでも多くさせたいと

希望した。また、大学生が子どもの頃の楽しかった思い出に88%が野外活動を挙げており、将来の自分の子どもにも62%が自然体験や本物に触れる経験が大切なことであると考えていた。これらのことは、“ヒト”は自然環境の一部であることの無意識の自覚であると考える。

レイチェル・カーソンは、地球の素晴らしさは生命の輝きにあると信じていた。地球はあらゆる生命が織りなす網で覆われている。生命の輝きの美しさに感動するのも、生命の輝きを探求するのも、守るのも、破壊するのも、人間なのである。人間は自然環境を何一つ創ることはできない。“ヒト”は自然環境の一部であることを自覚することが大切である。まさしく【自然の中にある（生命への畏敬)】を忘れてはならないことを教えてくれている。

私たち人間は“ヒト”であることを本能的に忘れてはいないのである。人々は目前の損得勘定に振り回され、大切な現実に向き合うことすら忘れているようだが、便利な生活が“人”を幸福にしてくれる訳では無いことも自覚しているのである。人間の子育てには、自然体験や本物に触れる経験が大切な事を知っているのである。

(5)　保護者の意識啓発

筆者（自然観察CONE指導者）は、K市少年自然の家主催行事に子育て支援メンバーの一員として参加している。この行事は２～３歳児を持つ親子対象の自然観察体験会である。「自然の中で、親子で一緒に遊ぼう！」と呼びかけて自然の家周辺という同じ場所で年間10回開催される。自然の中で親子が一緒に遊んでいる様子を観察し、『育ち』についての考察記録を挙げてみた。若い親の意識の高さに感動を覚える場面もある。

●砂利道・雨上がりの山道・ぬかるみ・木橋を渡る。緑のトンネルの中のひんやり感・樹液の出ている木の場所で甘酸っぱい発酵した匂いを嗅ぐ。“スズメバチ”の羽音の下、息を殺して低くなりじっと動かないようにしてやり過ごす。保護色をしている昆虫を発見する。通路で“ヤマカガシ”と遭遇し、ヘビが怖がらないように、ヘビから１m程の所を静かに１列になって通り越す。これは『幼稚園教育要領－５領域』の、自然の中の『環境』。安全への注意を聞くことができる『言葉』と、考えられる。

●草むらで、親子で“バッタ”や“トンボ”を追いかける。捕まえた虫をみんなに紹介し、名前を確認して声に出してみたり、姿を確認したりする。最後に、生き物は食べ物のある所でないと生きられないことを認識させ、逃がしてやるように促す。愛着が強くて放せない場合は、虫の住処や食事のことを伝えて【命】をいとおしむように指導して持ち帰らせる。これは『幼稚園教育要領－５領域』の、自然『環境』と、考えられる。

●自生らしい“ミント”の葉の香りを確認する。葉や虫などの匂いを嗅ぐ体験をさせる。これは『幼稚園教育要領－５領域』の、『環境』。五感を使って受けとめる体験をさせる『健康』と、考えられる。

●暗闇の中で、ピクニックシートを敷いてのおやつタイムを採ってみる。これは本来、人間の目は暗い所でもかなり見えるものであるが、いよいよ視覚が限られてくると、聴覚・触覚・嗅覚

・味覚などが研ぎ澄まされ、非日常の世界が広がる体験である。『幼稚園教育要領－５領域』の『健康』と考えられる。

●電燈もない山道を２時間ほど歩いたのだが、幼児たちは、しっかりと親の近くを歩き、怪我人や迷子が一人も出なかった。これは『幼稚園教育要領－５領域』の、『環境』と、考えられる。

●記念撮影に熱心で、フラッシュをたいたり、携帯を懐中電灯替わりに灯りをともしたり、［自然観察会･･･夜の森の中］からすれば少し困った行動をおこす父親がいた。これは『幼稚園教育要領－５領域』の、幼い子どもを持つ家族関係を垣間見るような光景は愛情表現か、父親のボスとしての家族サービスからかもしれないが『人間関係』と、考えられる。そうして「人としての育ち」へと繋がってゆくように考えられる。

自然観察体験はすぐに結果が現れるという作業ではないが、親子で自然の中を歩いた記憶は、長じて大人になってから、あるいは子どもが親になってからかもしれないが、心の奥に種を蒔いたように残る“幸い”であると考える。

日本以外、たとえばイギリスでは国中のあちらこちらを探検・観察しようといったイベントの募集チラシは見かけるが、親子対象の自然観察体験会ではない。休日には家族で森や公園へ出かけて遊ぶといった生活スタイルがあり、自然に触れる機会は特別なことでは無いようである。あたりまえの自然が身近にある生活スタイルであり、日本のように幼児向けの固定遊具が設置されていないと公園らしくないという感覚とは趣が異なっている。「自然歴史博物館」で求めた子ども向けの本は、館内探検のようなパズルやクイズが多くあり、子ども自らが立体的に自然に親しめるような内容である。いろいろな国の情報も交換し合い、地球環境の未来に思いを馳せ、子育て環境を整えて、大切に「子育て」をしてゆきたいものである。

(6)　人的環境・保護者の意識に期待

「子育て」とは、親や周りの環境が、子どもを育てることである。自然な心身の成長・発達と、さらに子ども自らが主体となって日々環境とかかわり合い、成長・発達を促すように、導くことである。

「子育ち」とは、子どもが本来持っている、育つ力である。『幼稚園教育要領解説』では「人は生まれながらにして、自然に成長していく力をもっている。」とある。自然な心身の成長・発達が「子育ち」である。

この、子ども側からの自然な心身の成長・発達の「子育ち」と、親・保育者側から子どもの成長・発達を促すように導くところの「子育て」との、双方の歯車が上手くかみ合うことが非常に重要である。たとえば、栄養豊富で高級なステーキだったとしても、歯も生えていない乳児には噛み切れず、消化不良を起こしてしまう。「栄養」であるどころか、「毒」や「害」にさえもなるという具合である。「栄養」や「子育て」は、その子どもの成長・発達のプロセスに照らし合わせて、与える時期やチャンスを見逃さないことが大切である。さらに「栄養価」や「子育て（援助）」の量や質も誤ってはならない。過剰に押し付けては、拒絶反応やアレルギー反応も起こし

かねない。子どもが必要とする時に適量をあたえることのできる、その子どもの「子育ち」に添った細やかな「子育て」が、望ましいのである。

「子育て」と「子育ち」の両輪で、子どもは成長・発達し、「育つ」のである。そして、さらに、この「子育て」をとおして、大人も育つのである。ここで人間が、「育て、共に育つ」には、自然環境が不可欠であることも心に刻みつけて欲しいのである。“ヒト”は地球のメンバーの一人の筈である。現代人はこの事を忘れたふりをして、思いあがった言動を重ね、地球環境を破壊し、錯覚し、人間性の荒み加減に拍車をかけてしまったようである。

地球を持続可能な世界とするには、環境問題に向き合うのには人間性教育の必要がある。今回の研究では特に保護者の意識教育の重要性を訴えたかった。親の意識で「子育て」の質が変わることに期待を込めたいのである。自然環境の大切さを再確認して、意識して子育てをして欲しい。地球の自然環境を大切に慈しむ生き方ができる心豊かな“人間”が育つことを期待する。

６．おわりに

自然環境の未来と「“ヒト”としての育ち」に対して、期待を捨てることはあまりにも性急である。子どもを育てるうえで、待つことが必要なように、“ヒト”という生物を育てるのにも時間がかかる。また、地球の自然環境も同じである。

この、宇宙的スケールの時間にのっとり、自然環境も“ヒト”の世界も「絶対にかくあるべき」という縛りの中ではなく、そしてまた一瞬たりとも同じ状態はないということを認識して、我々は「今」をもっともっと大切にすべきである。

謝辞

子育て支援サークル「Hコミュニティーセンター・Tクラブ」のメンバーの方々と、快くアンケートに協力して下さった皆さまに感謝いたします。

参考・引用文献

［1］レイチェル・カーソン著　上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社

［2］上遠恵子・原　強『＜沈黙の春＞を読む』㊼ かもがわブックレット

［3］マリナ・ハーマン/ジョセフ・パッシ/アン・スキムフ/ポール・トゥルーアー著　山本幹彦　南里　憲訳『子どもが地球を愛するために』人文書院

［4］根元正之　著『日本らしい自然と多様性－身近な環境から考える』岩波書店

［5］広木聖三　編『里山の生態学』名古屋大学出版会

［6］松尾嘉郎・奥窪壽子著『絵とき　土と遊ぼう－からだで感じる地球のいのち－』農山漁村文化協会

［7］山田卓三　文『からだを感じるあそび事典－五感をひらく原体験100集－』農山漁村文化協会

［8］後藤永子『保育者として生きる－保育指導論』スペース新社保育研究室

［9］文部科学省『新学習指導要領』2008年

［10］文部省『幼稚園教育要領解説』平成16年６月15日初版　フレーベル館

[11] ルソー著　今野一雄訳『エミール』岩波書店
[12] 今森光彦　文・写真『だれだかわかるかい？虫のかお』福音館書店
「かがくのとも」傑作集どきどき・しぜん
[13] 稲田　務　絵・宮武頼夫　文『なつやすみ虫ずかん』福音館書店
「かがくのとも」傑作集どきどき・しぜん
[14] 小田　豊・芦田　宏　編著　新保育ライブラリ『保育内容　言葉』北大路書房
[15] Dr Miranda Macquitty『Kids Ony』Natural History Museum
[16] Ben Morgan『Nature Activities. Rock & fossil hunter』Dorling Kindersley Limited

受理日　平成24年10月１日